

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0991000043		
法人名	有限会社ワイズプランニング		
事業所名	グループホームこころ黒羽		
所在地	栃木県大田原市大豆田468-4		
自己評価作成日	平成23年12月1日	評価結果市町村受理日	平成24年7月17日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokouhyou.jp/kaigosip/Top.do?PCD=09">http://www.kaigokouhyou.jp/kaigosip/Top.do?PCD=09</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人栃木県社会福祉協議会		
所在地	栃木県宇都宮市若草1-10-6		
訪問調査日	平成23年12月21日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

東日本大震災は日本人に留まらず私たち人類に、或いは日本に留まらず地球そのものに、いまなお多くの教訓を残し続けている。人類の傲慢さ、文明の利器のもろさ、日本人の強みと弱み、生命の価値観、政治と経済の問題点、挙げれば切り(桐)がない。しかしながら、悲しいかな私たちは足元のことしか見えない。それでもできることをできる者がなくては一步も前に進まない。大田原市は被災時の避難等に関する計画(不確定の部分あり)を策定したが、当施設としてできるかぎりの協力をすることとした。大田原市に対して、万が一の被災の際には緊急避難する場所として当施設を指定するよう提言をし、それなりの回答を得たので被災時における地域観の駆け込み寺的活用を推進していく。また、自己評価No.3に記載したとおり、当事業所が認知症の理解や支援についての発信基地になるよう努力を重ね、色々な方法で地域貢献をしていきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当ホームは市黒羽地区住宅街や郵便局、商店街が近く、生活に便利な場所に位置している。ホームの建物は、以前町の保育施設だった建物をリフォームしたものであることから、地域にも知られる所となっている。また、小規模多機能型居宅介護事業所が併設されており、リビング・ダイニングホールは互いに行き来でき、食事等も一緒に摂れ入居者も職員もお互いに顔見知りになっている。さらに、職員間の連携のもとに利用者が家庭で過ごしているような雰囲気作りと、利用者本位の支援に取組んでいる。特に、管理者は常に職員の意見を大切に受け止めており、職員のサービスの質の向上に向けた支援や職員の接遇面の向上等に力を入れている。地域との交流も行われており、近隣や散歩中の方などに声をかけ庭先にてお茶の振る舞いをしたり、中学校の職場体験学習の受け入れや認知症サポート養成講座の開催などを通じて認知症の理解や支援についての発信地としての役割を担っているグループホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	私たちは経営理念を仕事における羅針盤として動けるようになって来た。新入職員にあっても「私たちは生命の尊厳を念頭に置き、豊かな老いと生きがいづくりを喜びとし、共に感謝の心をもって社会に貢献します」という私たちの経営理念を心中深く浸透させる努力をしている。「生命の尊厳」「豊かな老いと生きがい」「感謝の念」「社会貢献」の4点を職員がふくらみを持って解釈でき、仕事の指針となるようにしている。	経営理念は常に利用者の為にをモットーに作られており、職員は毎日唱和して理念の共有に努めている。老後の将来像や日々感謝の思い・地域のための思いなど、4つの指針をもとに、職員は支援に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	ご近所の方々とういぶん親交が深まってきている。最近、地区市道の整備要望書を市に提出するに当たり、協力要請を受け、地区全署名者1000名弱のうち、こころの職員が617名の署名を達成し、区長から感謝の言葉をいただいた。今後ともお茶会などを通し、より密接なつながりを構築していきたい。また、職員による定期的なごみや空き缶拾いを行い、近所の美しい環境作りにも貢献しようとして全体会議で決定した。	自治会には賛助会員として加入している。管理者自らが隣接する空き地や周辺の草刈をしたり、職員が地域のゴミ拾いや缶拾いを行っている。また、地域の祭りや下水掃除・小学校の廃品回収などにも参加している。さらに、近所から季節の野菜が届いたり、近くを通る人にお茶を勧めるなど、地域の一員として交流に努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	H22年10月に認知症サポート養成講座の開催に当たり、区長名による回覧ちらしの各戸配布の協力があつた。参加者より「認知症に対する理解が深まった」の感想等々があつた。平成23年11月には黒羽中学校職場体験学習を担当し、認知症に対する理解と支援の方法等を学んでいただき、学校の担当職員より「生徒にとっても学校にとっても貴重な体験であった」との評価を受け、今後の継続性や交流についても話し合う機会となり、当事業所が認知症の理解や支援についての発信基地の役目を一部果たせたものと自負している。今後も色々な方法で地域貢献をしていく。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	過去に開催した運営推進会議において何度も外部評価の内容を参考に話し合っているし、今後もその方向付けは継続していく。外部評価は客観性を持っており、施設側からの一方的な意見ではないことを前提に話ができるので、公平なジャッジのような一面を持っていると思われる。結果的には意見が多く出る会議および協議となり、よりよい実際の運営につながっていくと思われる。	運営推進会議は2ヶ月に1回家族[全ての入居者家族に案内状を出し参加できる人]・入居者・民生委員・区長・市職員・地域包括支援センター職員の参加により、利用状況の報告や意見が出され、サービス向上に活かしている。東日本大震災直後にも開催され、災害時の連絡体制について議論されたり、会議の議題により消防署も参加している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	大田原市が単に情報提供者や指導者の位置に留まらず、同じ悩みを分かち合える仲間意識をもっていたり期待している。市の担当者と接する機会を今以上に持つことを念頭におきながら良好な関係をつくるようにしているので、より身近な存在として親しみが湧いてきているようにも思う。新しい情報入手の機会にもなり、施設のサービスの向上にも役に立っているため、これからも市との連携と交流を積極的に深めていく所存である。	市職員が運営推進会議に参加しており、状況については把握している。介護支援専門員が書類提出時に情報提供を受けるなど市との交流はまめに行っており、よりよい協力関係作りに取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を運営者及び全ての職員は正しく理解しており、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。玄関の施錠は夜勤者により毎夜21:00の戸締り時に行い、翌朝6:00を目安に開錠しているが、深夜や早朝の利用者がいらっしゃる場合はTPOに応じ、夜勤者の判断で調整している。基本的には利用者の安全を確保しながら自由に行動していただいている。しかしながら、身体の危険が予想される場合は安全対策を優先とさせていただいている。	心の拘束がなければ、身体拘束はないという考えを、職員は理解しており、人間として何をして欲しくないかを考えながらのケアを実践している。また、心の拘束や身体拘束に関する研修を実施し、職員の認識を深めながら、「今日一日楽しかった」と思えるケアに取り組んでいる。ヒヤリハットの報告は全体会議で議論され再発防止に取り組んでいる。また、常に安全と見守りにより昼間は玄関の施錠をしていない。	

グループホームこころ黒羽

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連法について勉強会の機会を作っているが具体的な対応には若干疑問が残る。家庭内ネグレクト問題はプライバシーが絡むので、問題感知した場合の処置方や行動は慎重にすべしという点は周知徹底している。心理的虐待については無意識性が高く、職員各々が認識をもち防止できるように日々指導をしている。あらゆる機会に管理者や職員は関連研修に積極的に参加し、自らが法の遵守者であることを公言できるよう努力している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を具体的に適用された利用者（関係親族）があり、円滑に起動している。成年後見制度および地域権利擁護事業の件は介護事業者を含み、利用者および関係親族等が認識せざるを得ない状況下にある。管理者は正確な知識をもち、外部への情報発信と共に適切なアドバイスや支援ができるよう努力をしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に先んじて、先ず利用者や家族等の不安、疑問点を可能な限り取り除くようQ&Aを行なっている。特に実際の支援者、協力者には契約内容の説明と相互会話を行い理解・納得をしていただいた上で契約書を取り交わしている。契約後であっても不鮮明な部分や未理解の部分があれば話し合いを繰り返し、契約前であれば、よく理解されるまで契約を延期するようにしている。また、解約時の注意事項は意識的によく説明をするようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の意見、不満、苦情をいち早く察知するのは職員の役目である。それには気楽にいえるような環境が大事であり、先んじて職員が開く耳を持つように心がけるようにしている。全職員は情報収集の役割を担い、管理者を中心に施設長、幹部職員が事実確認と内容分析を行い改善策等を検討している。必要に応じて、家族に報告・相談を行い、速やかに最善策で対応できるように努力している。	家族からは運営推進会議で公平な立場で意見を貰っている。また、職員は常に利用者・家族が気軽に意見が言えるような雰囲気作りをしている。以前、改善に関する意見や提案を受け、ホームとしても助かった事があり、出てきた意見は、運営に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	全体会議は職員主体の会議であり、職員個人の考えやアイデアを具現化したり、施設設備の改善などを経営者側に提言する機会であることを度々職員に伝えており、運営に関する提案などは積極的に行われている。また、毎日行なわれる申し送りの時における職員からの小さな意見や提案も運営に活かされるように大切に扱っている。	全体会議は毎月第2火曜日に開かれており、毎日のミーティングは朝・昼・夕と3回の申し送りがされ、その場で意見を聞くようにしている。管理者は若い職員からの意見も大切に、要望提案により毎週木曜日に研修を開催したり、交通安全の勉強会を行うなど、意見を反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は管理者や職員個々の努力や実績の状況、正確な勤務状況の把握をしており、給与水準、労働時間、やりがいなどの職場環境・条件の改善整備に努力し、各自の向上心へのモチベーションとなるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	企業は人なりといわれるように介護はまさに人によるところが大きい。人材育成は施設の重要な方針のひとつでもあるので、施設内外の研修は積極的に受けられるよう門戸は広く開けている。県で行なっている実践者研修や管理者研修は積極的に受講させているし、資格取得を望む者に対しては協力と援助は惜しまぬようにしている。		

グループホームこころ黒羽

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型部会の活動により、同業者の意見交換の機会も多くなり、その中でネットワークづくりに興味を持っている施設も出てきたと聞いている。当施設も他事業者と部分的なネットワーク作りは否定的ではない。大田原発信のアクションが県に対するモチベーションとなり、業界のレベルアップに寄与できるよう努力したい。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者の生活環境、希望するサービス内容、過去のサービス利用状況などを総合的に的確に確認するようにしている。初期において、いかに信頼関係を早く作るかは大変重要なポイントであるので、不安に思っていることを会話の中からリサーチし、利用者をよく知ることから始めるようにしている。特に初対面時に本人の本音を傾聴するよう心がけている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族と利用者との関係は表裏一体であるから、先ずはご家族の思いと希望を傾聴からスタートするようにしている。ほとんどの家族はサービスの内容と合わせて経済的な不安感も持っているため、具体的にパンフレットや試算表で示し、経済的に利用が可能かを判断できるような会話を心がけている。その上で、生活環境や介護状況、家族として希望していること等を総合的に確認するようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	先ず、過去のサービス利用状況の有無や現在の生活状況、介護状況などを総合的にアセスメントしてできる限りの確かな介護計画が策定できるように準備から始めるようにしている。また、必要とされる支援の内容を見極めるため、特に傾聴を心がけている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	当施設の経営理念にある重要事項である。職員が利用者の介護を通し、喜怒哀楽をともにし、そのなかから学び、互いに喜びと感謝の念が育つことを目標にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の話を傾聴し、心のありようや変化などを読み取るように努力している。結果的に相互間に信頼が生まれ、本人や家族にとって安心して生活できる環境の構築につながっていくと考えている。また、家族と一緒に本人を支える関係を構築されると、家族の介護負担が軽減され、ストレス等の解消に貢献できるものと思う。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会者は大歓迎で迎え入れをしており、場合によっては一緒に昼食を食べていただくこともある。馴染みの生活環境を知る人は古い友人やご近所の方に多いので、その関係が途切れないようにできる限りの支援をしている。そして、来訪者には一度ならず何度もたずねてきていただけるようお願いをしている。	当ホームが、以前保育園だったことで、入居者や知人・地域住民にとっても、馴染みのある思い出の場所となっている。地域の方や友人と、庭先で会話が盛り上がったり、面会に来た方が一緒に昼食を食べていくなど、馴染みの関係が途切れる事がないよう支援に努めている。	

グループホームこころ黒羽

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	地域密着型施設ならではの利用者が知り合い同士や友達関係にあったりするケースが多い、以前から互いに関わり合ったり、支えあったりする環境にあったという利用者もいる。このような人間関係を大事に保ちながらも、上手にコミュニケーションがとれない利用者が孤独を感じないように利用者同士の良好な関わり合いを強く支援している。そのために利用者一人ひとりの性格、趣味等、昔の生活環境をできるだけ詳しく具体的に把握するようにしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後であっても家族などの希望があれば総合的に関わっていくようにしている。また、他の施設等に移動される場合はよりよい介護サービスが受けられるバックアップを心がけている。また、地域密着型の介護施設の役目とは何かという問いを常に持ち、向上心や問題意識を持ち続け、相談を受けたり、可能な支援を続けるようにしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ひとりひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努め、実際の計画に反映できる工夫をしており、関わるスタッフは情報共有を図り、密度の高いカンファレンスを行えるように努力している。	日々の関わりの中で、利用者一人ひとりの思いを感じ取り、職員間でそれらを共有したうえで、ケアに取り組んでいる。思いや意向を把握したうえで、お花の先生をしていた方には玄関の花を生けてもらう等、本人本位に検討している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントの充実を図り、本人、家族と情報交換を絶やさず行い、これまでのサービス内容の検討も随時おこなっている。また、よりの確かな介護が提供できるようにひとりひとりの生活の歴史を尊重しながら、本人がこれまでどの様に暮らしてきたのかを把握するようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ADLはもちろんのこと、一人ひとりの一日の過ごし方、趣味趣向や得意とするものなどを客観的かつ総合的に把握するよう努力している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	諸々の意見やアイデアを本人、家族、スタッフなど関わる人達から入手し、個々の趣味やできることのリサーチを行い、ひとりひとりに合った本人優先の介護計画作成を心がけている。	職員2人対利用者1人の担当制をとっており、本人の意見の聞き取りに努めている。また、介護支援専門員から現状のケアやアイデアを聞く他に、家族の来訪時や電話等で意見・要望を聞いている。家族は穏やかに過ごせることを望んでいることが多い。それらをもとに、職員ミーティングで議論し、本人本位の介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護計画の見直しに活用するためだけではなく、日々、利用者の行動などを記録することは体調変化の早期発見にも繋がるため、重要な資料になる場合もある。また、体調により個別のチェックシートを作成し、誰が見ても理解しやすくしている。		

グループホームこころ黒羽

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者本人やご家族の希望をできるだけ取り入れ、柔軟性に富んだ支援は当施設の得意とする部分でもあるので、今後も多機能性を活用し、色々なニーズに応えられるよう支援を開発していく所存である。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源を最大限に活用するという意味では、民生委員や各種ボランティアグループ、警察署、消防署、文化・教育機関、商店会、地域住民の方々等とうまく協働しているといえる。運営推進会議委員や地域の人達との関わりを積極的にもち、よりよい支援ができるようになってきている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	当施設と利用者のかかりつけ医とは常日頃より良好な関係を保っており、通常の受診は家族にお任せしているが、場合によっては計画作成担当者または看護師が家族と共に診察に立ち会うこともある。また、診察の結果について看護師を含む全職員が随時情報を共有できる体制が取れている。あわせて、緊急時や往診が必要な場合でかかりつけ医が対応できない場合には、施設と十分な連携がとれている協力医の存在をまえもってご家族に伝えている。	かかりつけ医は本人や家族の希望を大切にし、家族の協力を得て受診しているが、ホームの直ぐ前に協力医があることから、半数以上は協力医に変更している。受診は家族に依頼しているが、遠方の方は看護師が付き添い、適切な医療が受けられるよう支援している。また、協力医は利用者を気にかけており、夜間の往診にも対応してくれるなどの協力関係が築かれており、利用者・家族の安心へと繋がっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護者は職場内の看護師との連携を保ちながら、利用者との日常の関わりの中で得た情報等を適切に看護師に伝え、相談し、看護師はご家族と情報交換しながら受診や看護を受けられるよう支援している。また、訪問看護師を利用する場合はご家族と相談のうえ、よりよい対応を考えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院についての必要な情報は医療機関と共有しており、安心して入院したり、早期退院についての情報交換や気軽に相談ができる施設の体質作りを心がけている。また、医療に関して利用者やその家族が適切な対応が選択できるように日ごろより病院関係者との良好な人間関係作りにも努力している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	今期、複数の利用者家族より看取りの希望があり、医療機関、本人、家族、施設、場合によっては地域が連携しなくてはならない絶対の必要性を学んだ。最終段階では前述した家族の協力と医療関係の協力、職員の協力により所期の目的を完遂できた。今後、これを機会に重度化した利用者あるいは終末期の利用者対応の取組みについて検討を重ねていく所存である。それには医療の知識と必要な法令の学習、施設の設備などを含め多岐に渡った準備が必要であろう。	看取りについては、本人・家族の希望を受け入れている。平成23年3月と10月には、看取りを経験した。今後、重度化や終末期について協力医や職員間で支援方法について協議し、支援方法等について共有しながら、思案して実施に取り組む姿勢である。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	応急手当や初期対応について訓練指導を担当看護師が講師となり勉強会の機会に度々おこなっている。事故発生時における協力医や担当医との連携はうまく図れており、管轄の消防署や自衛消防団の協力も得られている。職員の自主的な研修への参加に対する支援と急変や事故発生時の訓練は定期不定期にかかわらず継続していきたい。		

グループホームこころ黒羽

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署の協力と指導のもとに毎年2回消防訓練を行なっているが、地区の消防団や近所の方々の協力も得られるようになった。また、地震対策は東日本大震災発生時から検討しており、平成23年3月16日に緊急運営推進会議を開き、災害時の連絡網と手段について協議を行なった。常々、警察はもとより近所の方々への被災時における協力依頼をしており、安全対策について利用者の家族とともに学ぶ機会を複数回設けている。	消防署指導の下、年2回併設の事業所と合同で地域の消防団や住民の協力を得て、消防訓練を実施した。また、職員による夜間想定通報訓練も複数回実施している。東日本大震災後は地域における協力体制を構築したり、メールアドレス登録により家族・職員の密なる連絡体制が出来ている。備蓄は、米を備蓄している。	さらなる安心の確保につながるように、災害連絡網の確認や近隣住民の継続的な訓練への参加、備蓄に水を加える等の工夫を期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者のプライドやプライバシーを尊重することは経営理念にも繋がる大切なことと捉えており、職員は理解している。記録に関してもそれらを十分留意するように確認しあっている。新入の職員もいるので、今後も言葉掛けや対応についての勉強会を続けていく所存である。	入居者一人ひとりを尊重して呼び名は「さん」付けで呼んでいる。職員は言葉掛けや対応に付いての学習や、羞恥心に配慮したケアの声かけなど、支援方法を共有しながら、支援に取り組んでいる。	新たに加わる職員もいる事から、人生の先輩への心がけや馴れ合いにならぬ言葉掛けに付いて、接遇の心得等も含めて、職員同士で確認されることに期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員は利用者が本当に言いたいことや希望が何なのかを理解できるよう傾聴を心がけている。思いや希望についてその人なりの力に合わせた表現が気軽にできるように支援している。また、自分自身が決定し、納得しながら生活できるように一人ひとりとの関わりを尊重し、今後も出来るだけの支援をしていく。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ご利用者一人ひとりがその日をどのように過ごしたいのか、希望に添った過ごし方をさせていただいている。ただし、本人のためになるかどうかの適切な判断は必要であり、場合によっては複数の職員で検討が必要なケースもあり、週一の勉強会のテーマを「私(利用者)の望むこと」としたこともある。また、職員と利用者相互の会話ができるように、ご利用者自身が発する言葉を大切にしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご利用者の毎日の更衣や入浴後の衣服等については、本人の希望を優先して自己決定できるように支援している。理容に関しては、月に1〜2回程度のペースの出張サービスがあり、それを利用している。担当の理容師と世間話をすることを楽しみにしている利用者もいる。ショッピング等に出かける場合は個人的にゆっくりできるよう援助している。美容に関しては家族と本人に決定していただいている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	当施設が使用する食材は冷凍食品を一切使わず、既製品の利用もしない。昼食は厨房専門職が手作し、後片付けはできる範囲で利用者にも手伝いをお願いしている。夕食づくりはできる範囲で職員と共に行い、食事の好み、摂取可能な食物などをリサーチして可能な範囲でアレンジしている。食事は利用者にとって楽しいひとときであるので、職員は雰囲気づくりにも努力している。	献立・食事(昼食)は厨房専門職員が考え作っているが、朝食・夕食は職員が作っている。入居者も出来る範囲で片付けをしている。時々近所から食材の差し入れもある。食事は併設の小規模多機能型事業所の利用者と同様に、会話を楽しみながら、職員も一緒に摂っており、食事を楽しむ雰囲気作りをしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	昼食は特に栄養バランスや個々の体調に合わせたものになるよう考慮し、厨房専門のスタッフが調理を行っている。また、栄養摂取や水分確保の支援をするために体調や状態の変化に応じて随時内容をアレンジしながら1ヶ月の献立を作成し、日々の微調整をその都度行なっている。夕食、朝食についても同様な気遣いと工夫をしながら提供するようになっている。		

グループホームこころ黒羽

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、必ず口腔ケアを行なっている。一人ひとりの状態に合ったケアをスタッフが声掛け誘導し、食後口腔内に残渣物を残さず清潔を保つように支援している。認知症状により対応が困難な場合があるが工夫することで定期的に口腔ケアが出来ている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレ排泄や自主的排泄を基本としており、必要に応じて声かけ誘導しながら、気持よく排泄できるように支援している。介護職員は利用者ひとりひとりの力や排泄のパターンや習慣を理解し、オムツ使用者の使用量を減らすよう努力している。また、排泄の失敗が不穏を誘発する場合もあるので、できるだけ失敗しないように気配りを心がけている。	職員は入居者一人ひとりの排泄パターンを把握しており、定期的なさり気ない声かけと早めの誘導により、自立排泄が継続出来るよう努めている。夜間のみポータブルトイレを使用する方もあり、使用後はさり気なく速やかに片付ける支援をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	適切な無理のない体操や自力歩行を継続する働きかけを行い便秘にならないよう、かつ便秘体質が改善されるような対策をしている。また、食物繊維食材のバランスのよい摂取と十分な水分の補給などを行い、便秘の予防やより有効的な対応を心がけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	個々の体調や生活習慣、希望に合わせて楽しんで入浴できるよう支援しており、場合によっては入浴できない場合は足浴などを施行するなどできるだけ柔軟な対応を心がけている。また希望によっては自宅生活の習慣に合わせて就寝前の入浴も随時可能である。	入浴は毎日可能となっており、時間は16時～18時の設定となっているが、希望に応じて、就寝前の入浴も可能な体制になっている。過去に実施した経過もあり、柔軟な対応に努めている。また、体調により入浴が困難な方には、足浴の支援に努めるなど、職員は個々に応じた支援を行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	安眠ができていないか否かは健康のパロメーターと考えており、夜勤者は安眠度のチェックを欠かさないようにしている。ひとりひとりの生活習慣や体調、状態に合わせて、就寝時刻をアレンジするようにしており、睡眠不足が懸念される場合は昼寝をさせていただくようにしている。また、清潔な寝具類の提供は安眠の大事な要素であるので極力心を配るようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員による服薬援助の方法の指導と薬の管理は専属の看護師が責任を持っておこなっている。服薬を間違いなく行ったかどうかの結果をチェック表に記入し、日中の服薬最終チェックはその日のリーダーがおこない、夜間については夜勤者が行なっている。処方された薬の説明書等は個々のファイルに綴じ込み管理しており、職員全員が把握できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活歴を尊重し、できることによる楽しみを得られるように工夫しており、今後も役割分担を取り入れながら色々考えて取り組みをしていく所存である。菜園作りは植え付け、追肥、草取り、収穫など一貫した作業を農作業に熟達している方を中心に楽しみながら参加できるようにしている。また、裁縫が得意な方に雑巾縫いなどをお願いすると「大変だ」と言いつつも役に立っている喜びを笑顔で表現している。		

グループホームこころ黒羽

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	月一回の外食会には普段は行く機会が少ないファミリーレストランや回転寿司、ラーメンショップ、そば処、道の駅レストラン等にお連れするようにしている。また、紅葉狩り、お花見、初詣、お祭り、講演会へのお出かけや季節ごとのドライブは積極的におこなっており、体調や天候、季節に応じて外出する機会を多く作っている。施設敷地内の庭先に出て花を眺めたり、施設の周囲を散歩したり、天候と体調をみながら外の空気を吸えるよう支援している。	毎月1回、外食会が予定されており入居者の楽しみの一つとなっている。また、季節に応じたドライブや道の駅で語りべを聞いたり、文化祭見学をするなど外出も多い。天気の良い日には近所の人と一緒に庭先でのお茶会を楽しんだり、近くの河川公園に散歩に出かけ、白鳥を見物するなどの外出支援をしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現金は家族の了解を得て、事務所の金庫に保管させていただいているので、利用者が必要なものやお菓子類の買い物希望する時などは状況に応じて付き添い、自分の財布から現金を出して買えるように支援している。また、預かり金については領収書と金銭管理を帳簿に記載し、管理者が責任をもって協力している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者が電話を使用したいときには状況を判断しながら自由に使用していただいている。暑中見舞いや年賀状により家族や知人と交流を継続できるように作成や投函の支援をしている。また、利用者の友人知人などに手紙やハガキなどを書いていただけるよう依頼することもある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間は明かりのとおりかたを工夫し、視覚的に負担のかからないように配慮している。また、テレビや音楽は、できるだけ慣れ親しんだものを流したり、楽しめる内容のものにしている。絵画や利用者の絵や毛筆の作品を飾ったり、季節を感じられるものを利用者と一緒に作成し、作る楽しみと飾る楽しみが同時にできるように工夫している。	共用空間のリビング・ダイニングルームは、併設の小規模多機能型事業所との共有空間となっており、ウッドデッキにも出れるようになっている。天窓からの採光や空気の循環も確保され、五感を刺激することなく、居心地良く過ごせる空間になっている。また、アニマルセラピーとも云える小さな犬も入居者の目を細めるなど、工夫をしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	通路や玄関には歩行の障害物にならないよう気を配りながら、ソファや椅子を配置し、サブリビングスペースをつくり出している。畳の間も臨機応変に活用したり、TPOに合わせホールのテーブル配置をアレンジし、プライベートの場所を確保することもある。一種の社交場であるホールは読書やゲームができるスペースになったり、ひとりひとりが思い思いの居心地のよい場所として活用できるよう努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ひとりひとりの好みに合わせた居室で生活していただくことを基本にしている。今まで自宅で使い慣れ親しんだ家具や寝具を使い居室作りができるよう工夫している。また、本人の趣向に合わせた絵や置物を飾ったりして、穏やかな気持ちで暮らせる環境作りを心がけている。	居室は入居者の好みのベッドやタンス・使い慣れた寝具が置かれており、写真等が飾られてある。部屋の配置は本人の思うようになっており、職員の支援により清潔に保たれ、居心地よく過ごせる工夫に努めている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	車椅子使用の利用者が施設内を安全かつ自由に自走できるように環境を整え、自力で使用できる広いスペースのトイレも有効に活用できている。随所に設置してある手摺りやフラットなフロアなどできる限り自立した生活がおくれるよう配慮している。		